エッセイ「ヴィクトリア朝文化研究の〈場所〉|

索引の旅

富山 太佳夫

この20年程の間に文学の研究は大きく変化してしまい、我々はなんともきつい状況に直面することを強いられてしまったように思えて仕方がない。これも所詮は世紀の転換期につきまとう宿命のひとつと言えなくもないかもしれないが、18~19世紀の英文学の研究にしてもそれを回避してしまうことはできなかったように思われる。その理由のひとつは、20世紀の後半における数多くの新しい批評方法の出現によってもたらされたテクストの読み方そのものの多様化であり、更には実際に手にとって読めるようになった作品の多数化であるだろう。電子メディアの活用も単純な喜びにはつながらないことは、衆知の事実であるだろう。

やまほどの作品と多種多様な読み方——1947年生まれの私がまだ学生であった今から半世紀ほど前には、それはとても予測できないような事態であったことを、私としては今改めて痛感するしかないのだ。しかも、そうした状況の中で、私は研究を続けて行くしかないのである。どうすればいいのだろうか。作品を読む、研究の現状を知る、そして自分なりの研究をまとめあげる——そのためには、何を、どうすればいいのだろうか。誰に相談すればいいのだろうか。

*

ジェイン・オースティンの作品にはハードカバー版からペーパーバック版までいろいろなものがあり、しかも日本語訳もいろいろあるので、入手するのは造作もないことであるのだが、今私の前にあるのはジャネット・

トッドが編集責任者をつとめたケンブリッジ大学版である。その理由というのは簡単なこと、注釈の出来具合がこれまでのものと較べてずっといいということである。私が何よりも興味を引かれたのは、あれこれの作品の注釈本8巻ではなくて、『ジェイン・オースティンのコンテクスト』(Jane Austen in Context, 2005) と題された巻であった。この巻の全40章のうちの25章を構成する「歴史と文化のコンテクスト」の部分には、社会史や文化史に関係する見出しがずらりとならんでいるのだ。「農業」、「都市」、「風景」から、「哲学」や「心理学」にいたるまで。そして、「ナショナリズムと帝国」という10頁ほどの論文。ここには、従来から知られている関連コンテクストにオースティンを安置すると同時に、これまでの研究では注目されることの少なかったコンテクストにも結びつけてみようとする志向性も感じとれるだろう。

しかしながら、そうした方向性をあざやかに具体化してみせたのは、つまり、オースティンを囲んでいた歴史の実体の諸相をあざやかに描き出してみせたのは、ロイ=レズリー・アドキンズの『ジェイン・オースティンのイングランド、ジョージ王朝時代から摂政期の日常生活』(Jane Austen's England: Daily Life in the Georgian and Regency Periods, 2013)である。すぐれた歴史学者夫妻の手になるこの本は、その刊行の翌年にはペンギン・ブックス版として刊行されるほどの高い評価を得ているのである。しかも表紙の頁の前の二頁には二人の写真がのせられ、その二頁と裏表紙は、この本を称賛する書評の抜粋でうめつくされているのだ。未知の本を買おうとするときにこうした書評の抜粋が役に立つことは知っているものの、これだけ華やかな列挙はあまり眼にしたことがない。

これまでのオースティン研究とは違う一次資料をふんだんに活用したこの本は、社会文化史の角度からのオースティン像をみごとに提示していると言ってよいだろう。しかもこの本は、ただオースティンの人生と作品について考えるのを助けるだけでなく、この小説家の生きた時代の細部にも眼を向けることをすすめ、かつ要請してくるのだ。この本は『ジェイン・オースティンのコンテクスト』とは別のかたちで、それよりもはるかに具体的に、この小説家を歴史の中に混在させようとしていると評価していいだろう。

*

ともかくジェイン・オースティンという名前には、これと言った明確な理由もなしに、さまざまの場所で出会うことになるのだが、その特異な場所のひとつとして忘れられないのが、デイヴィッド・ダビディーン他編の『オックスフォード・コンパニオン版黒いブリテンの歴史』(The Oxford Companion to Black British History, 2007)である。各頁ダブル・コラムで、550頁近くもあるこの事典を購入して開いた瞬間に、私の眼の前にMansfield Parkの項があったのだ。勿論オースティンの作品は30歳台にすべて読了していたのだが、この小説はまだ私の好奇心を引きつけることはなかったようである。そのような作品についての記述が眼の前に出現し、そこには次のような説明が含まれていたのである。

エドワード・サイードの『文化と帝国主義』が1993年に出版されるまで、バートラムの所有する領地に対するオースティンの言及は、批評家たちからは見逃されていた。……サイードの書いている通りであって、「奴隷売買と砂糖と植民地の農園主階級が存在しなかったならば、バートラム家の者たちは存在しなかったであろう」。

30代の初めに出会って以来――最初はSaidという名前をどう発音すればいいのか分からなかったし、まわりのひとたちに訊いてみても分からなかった――ずっと読み続けてきた批評家の名前がそこにあったのだ。その彼の本を今ではすべて持っている。『オリエンタリズム』は大学院の演習のテクストとして使い、学生たちをキリキリ舞いさせたこともある(そのうちの何人もが、今では大学の教授となっているのだ……あァァ)。そんな彼の本をまた読み直ししようかと考えていたのだが、そんな私の背中を押すかのようにこの記述が眼の前に出現したのだ。こんな偶然が、本を読み、あれこれと考えだし、あれこれと調べ、そして場合によっては、エッセイや論文を書き出す契機となることもありうるのだ。考えてみれば、私の場合、研究テーマの設定には必然的なものは何もなかったかもしれない――動機は偶然、そう、偶然以外のなにものもなかったような気がする。

私は誰か特定の作家や、特定のテーマから出発したことはないような気が する。

確かに大学に入った当初にジョージ・エリオットの『サイラス・マーナー』(教科書用の書き直し版) や007シリーズやサマセット・モームの小説を読んだことは記憶しているものの、そうした作品は誰かに勧められたものではなかった。そう、私は図書館の中に入ってあれこれの百科事典をめくっていたのだ。そこには簡潔な説明と参考文献のリストなどがずらりとならんでいた。しかも使う事典を取りかえれば、同じ項目でも説明の内容が違うのだ。この事実に気がついたときには、私にとって大学とは図書館で本を読む場所ということになってしまい、教室とはくたびれたときに休憩する場所あるいは仮眠をとる空間という場所ということになってしまった。メモをとるのは講義中に出てくる人名や事項名——そして図書館に戻るということになる。

*

私の通うその図書館の棚には The Encyclopedia of Victorian Literature (Wiley-Blackwell, 2015)、4巻本がならんでいる。私はその中からとりあえず第2巻を取り出して、索引を確認してみることにする。ダブル・コラムで80頁を越えるそこにはAからZまでのおびただしい数の項目があるのだが、orientalismの項があることが明記され、更にEdward Saidの他に Rudyard Kipling、colonialism and postcolonialism、colonial and postcolonial literature、concepts and definitions、travel literature、そしてサイードの著作である Orientalism そのものを説明している頁数も提示されているのである。更に colonialism and postcolonialism の項を確認してみると、Africa、Australia、Canada、Carribean、India、New Zealand、Pacific Islands などの説明頁が明記され、Rider Haggard や Olive Schreiner や詩人 Tennyson についての記述頁も明記されているのである。

Elizabeth Gaskel の項では合計 27 の項目で、この作家の関係した人物や問題が説明されていることが分かるようになっている。つまるところ、こうした情報をわけもなく提供してくれるのが、この21世紀の初めに出版

索引の旅 83

される各分野の各種の事典の特徴だと考えていいのではないだろうか。残 念なのは、そうした事情の変化があまり知られておらず、それを活用でき る研究者の数もまだ少ないということである。

——立正大学教授·青山学院大学名誉教授